「人前で主イエスを認める」　2023年07月21日

「言っておくが、誰でも人々の前で私を認める者は、人の子も神の天使たちの前で、その人を認める。しかし、人々の前で私を拒む者は、神の天使たちの前で拒まれる。人の子の悪口を言う者は皆赦される。しかし、聖霊を冒涜する者は赦されない。会堂や役人、権力者のところに連れて行かれたときは、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配してはならない。言うべきことは、聖霊がその時に教えてくださる。」（ルカ12：8～12）

キリスト教信仰は、主イエスに徹底的に集中する。主イエスに神を見、そこに救いを体験するのである。主イエス以外のところからキリスト教信仰に到ることはない。世には「神」という言葉で宗教を説くが、その神は人間に都合よく解釈されがちな神で、それらの神々はキリスト教とは無縁である。キリスト教は主イエスの言葉と業、その究極は十字架で死に、死からの復活に根拠を持っている。

主イエスは、「言っておくが、誰でも人々の前で私を認める者は、人の子も神の天使たちの前で、その人を認める」と語られた。人々の前で、主イエスを信じ受け入れる者は、人の子（主イエス）も神の天使たちの前で、即ち、聖なる場で、その者を受け入れる。主イエスと信仰において関わる人は神に受容され、祝福に与る。主イエスを通してのみ、神と結びつくからである。逆に、「しかし、人々の前で私を拒む者は、神の天使たちの前で拒まれる。」主イエスとの関りを拒否する者は、天使たちの前で拒絶される。

キリスト教信仰の核心を語った後、興味深い二つのことを述べている。一つは「人の子の悪口を言う者は皆赦される。しかし、聖霊を冒涜する者は赦されない」である。この言葉は、マルコ福音書3章のベルゼブル論争の時に語られている。主イエスの力強い奇跡を見て、律法学者たちは嫉妬し、主イエスの業は悪霊の頭であるベルゼブルの力で行っていると、難癖をつけた。主イエスは、サタンが内輪もめすれば、立ち行かず、滅びてしまうと言われた後、「よく言っておく。人の子らが犯す罪やどんな冒涜の言葉も、すべて赦される。しかし、聖霊を冒涜する者は永遠に赦されず、永遠の罪に定められる（マルコ3：28～29）」と語っておられる。主イエスの聖霊による働きに対し、ベルゼブルの仕業と言って、立ちはだかる律法学者への怒りとも取れる。主イエスは、ご自分への裏切りや拒否を受けても、ペトロの場合のように、赦しておられる。主イエスへの悪口、冒涜の罪は赦される。しかし、聖霊を冒涜する者は赦されない。聖霊は、神と人とを結びつける神ご自身で、この方を拒否する者は、神との関りを切られるので、祝福に与ることができないという意味であろう。この言葉は背教を戒めた言葉ではないかと思われる。

もう一つは「会堂や役人、権力者のところに連れて行かれたときは、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配してはならない。言うべきことは、聖霊がその時に教えてくださる」である。この言葉は、マタイ福音書10章で、主イエスが弟子たちを宣教に遣わす時に、「あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で鞭打たれる。また、私のために総督や王の前に引き出されて、彼らや異邦人に証しをすることになる。引き渡されたときは、何をどう言おうかと心配してはならない。言うべきことは、その時に示される。というのは、語るのはあなたがたではなく、あなたがたの中で語ってくださる父の霊だからである（マタイ10：17b～20）」と言われた励ましの言葉である。これらの記述は「人々の前で」とか、背教の戒め、聖霊の教えなどから、著者ルカの時代の宣教を背景にした勧めであろう。